



第52回 もちつき大会を開催しました

センターで毎年恒例の行事となっている、もちつき大会の季節がやってまいりました！今年も近喜^{こんき}商事株式会社様からのご寄附とご協力を頂きまして、52回目となるもちつき大会を盛大に開催することができました。

感染症及び食中毒対策のため、もちつき会場である食堂内への立ち入りはご遠慮いただいていたため、多くの方が食堂の窓越しに、もちつきの様子をご覧になっていました。近喜商事株式会社の社員の皆様と、センター職員が協力してもちをつき、食堂内は「ぺったん、ぺったん」とおもちをつく音や、杵を振り下ろす時の「よいしょー」というかけ声が響き渡っていました。

一生懸命ついた、つきたてのおもちは、その場であんこをくるんだり、きなこをまぶしたりして加工し、パックに詰めた状態で、外来患者のみなさんや利用者さんに配布しました。

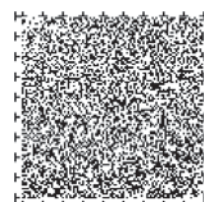
このような伝統的な行事を、今後も長く継続していけるとよいですね。

近喜商事株式会社の皆様、協力していただいた職員の皆様、ありがとうございました。



Contents

もちつき大会について	1
リハビリテーション科紹介	2・3
新任医師紹介・モンゴル国医師の子どものこころ科医療研修、 愛知県医療的ケアライン紹介	4・5
はるひの家紹介・研究所トピックス（障害システム研究部）...	6・7
Topics	8



リハビリテーション科について



リハビリテーション科は、当院に通院される方々が運動機能やその他様々な機能面において力を存分に発揮できるよう促し、その能力を活用して豊かな生活を送っていただけることを目標に、在籍する医師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、視覚障害訓練士が必要な部署とも連携を図りながら、日々業務に邁進しています。さらに院内での各種チーム医療への参画、勉強会、院外での活動として講演会や実地での観察指導、県内支援者の方向けの講習会（「リハビリコース」）、周辺の療育施設との会議など、院内院外を問わず多岐にわたる情報共有を図っています。小児病院では全国にかなり珍しい「リハビリテーション科専門医・指導医」が在籍し、同専門医を目指す方々を指導するための施設として日本リハビリテーション医学会の認定をいただいています。



リハビリテーションコースの風景

理学療法では、姿勢保持、運動能力、呼吸機能の維持・向上を中心に機能の向上を目指した訓練を提供しています。さらにライフステージに応じて、リハビリ場面以外でも安楽で安定した姿勢や自主的な運動を行えるように運動方法や車椅子等の設定・調整も検討し、ご家族や病棟スタッフと共有しています。当院の特徴として、整形外科的手術やボツリヌス療法、バクロフェン療法などを積極的に実施しており、実施前後の評価や集中リハビリを行うことにより運動機能の向上に努めています。また、重度の脳性麻痺や筋ジストロフィー症患者に対する呼吸理学療法のニーズも高く、院内や院外向けの講習会や家族への指導も実施しています。



理学療法室

作業療法では“あそび”を通して運動面だけでなく、認知面、情緒、コミュニケーションなどの発達促進・機能向上を促すためのアプローチを行っています。必要に応じて、お子様に適した道具や補助具

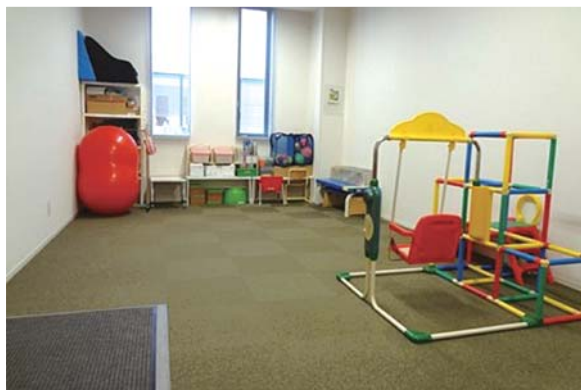


作業療法室

（スイッチ等）の作製や日常生活を過ごしやすくするための環境面での工夫やかかわり方のアドバイス等も行っています。摂食・嚥下障害には、多職種と協働で評価・治療方針を検討しており、乳児期の哺乳から自閉スペクトラム症などの食行動の問題（拒食・偏食）まで幅広く対応しています。また、研修を通してお子様に携わる医療、福祉、教育関係者やご家族の支援を行っています。

言語聴覚療法では、主に「ことば」「聞こえ」「食事」「コミュニケーション」に支援が必要な方の相談・評価・リハビリテーションなどを行っています。外来では小児を対象に『言語相談』という相談業務を始め、言語訓練、構音訓練、吃音相談、摂食嚥下評価及び訓練、聴力検査、AAC（拡大・代替コミュニケーション）の活用支援、などを行っております。

日常の経験がよりよいものとなるためには周囲の大人の関わり方が重要であると考え、リハビリテーションにご家族も参加していただき具体的な方法をお伝えするなど家族支援に力を入れています。入院では、重症心身障害児者の方々を対象に、発達促進支援やコミュニケーション支援、摂食嚥下評価・訓練（VF等も含む）を行っております。臨床内容は多岐にわたっておりますが、必要な方に必要な支援をお届けできるようスタッフ一同日々工夫しながら臨床を行っています。



言語療法室

視覚障害訓練室には「中枢性視覚障害」のお子さんが多く通っています。中枢性視覚障害は眼球自体に問題はなく、脳がダメージを受けたことによる障害です。保護者からは「見えていないみたい」とか



視覚障害訓練室

「おもちゃを追視しない」などの訴えがあります。訓練ではお子さんの眼の使い方を評価し、人や物を見つれたり眼で追いかけたりする練習を行います。また同時に、おもちゃで遊ぶ場面やコミュニケーション活動の場面で、視覚の活用を促すことも行います。当訓練室に通うほとんどのお子さんには重い障害があり、医療的ケアの必要な人も多いです。どうすればうまく見たり遊んだりできるか、保護者のみなさんと一緒に考えながら取り組んでいます。



リハビリテーション科職員です

新任医師紹介



小児外科医療全般を専門としておりますが、特に前任地の名古屋大学では内視鏡手術を多く経験して参りました。小児外科分野の内視鏡外科技術認定医は国内に60人いるのですが、そのうちの一人です。当院においても安全な内視鏡外科手術・低侵襲手術の普及に尽力して参ります。よろしくお願いいたします。

(趣味・特技 野球)

2023年7月～



小児外科
横田 一樹医師

これまで急性期病院や子ども病院で小児科医、新生児科医として15年ほど勤務し2019年からは名古屋市立大学で遺伝性疾患の研究を行いました。

様々な経験を活かし皆様とともに歩んでいきたいと思ひます。

よろしくお願いいたします。

(趣味・特技 散歩)

2023年10月～



小児内科・遺伝診療科
大辻 塩見医師

これまで、愛知県内で急性期病院での小児科診療に携わってまいりました。映画が好きですが、子どもの影響で電車についても少し詳しくなってきました。患者様、ご家族に寄り添い、よりよい医療を提供できるよう努めてまいりたいと思ひます。よろしくお願いいたします。

(趣味・特技 映画鑑賞)

2023年10月～



小児神経科
吉村 通医師

モンゴル国医師の子どもこころ科医療研修

現在、モンゴルには児童精神科の研修や専門医の制度などがなく、子どもこころの診療に専門的に携わっている医師はほとんどいない状況です。名古屋大学は2013年以来、「心の発達支援研究実践センター」を中心に、モンゴルの特別支援教育、児童精神科医療の発展のための協力事業を続けています。

今回、愛知県医療療育総合センター中央病院もこの名古屋大学のプロジェクトに協力することになりました。令和5年8月25日、モンゴルより国立医科大学精神科の Khishigsuren 教授、小児科の Erdenetuya 教授、モンゴル国立精神科病院院長の Vanchindorj 先生をはじめ9名の先生方が、子どもこころ科の設備、診療状況などを見学に来られました。今後も当院の子どもこころ科は、モンゴルの児童精神科医養成のために、モンゴル国での講義や、研修医師の受け入れなどの協力を続けていく予定です。



愛知県の医療的ケア児者の家族会「愛知県医療的ケアライン」が設立されて1年が経ちましたが、代表の村瀬晴美さんに活動の目指すところなどを伺いました。

令和4年3月27日に、医療的ケア児者と家族および医療・福祉などの支援者を含む、全国47都道府県を繋ぐ家族会「全国医療的ケアライン」が発足しました。

全国に紐付けて愛知県も県内に暮らす医療的ケア児者と家族および福祉・医療関係者など支援者の協力のもと、愛知県の医療的ケア児者の家族会として令和4年12月25日に「愛知県医療的ケアライン」という名称で発足いたしました。

今日の医学の進歩により、重い病気や障害を抱えて生まれてきても命が救われるケースが増えました。その一方で、様々な医療的ケアを抱えたまま退院し在宅移行する子供や成人も年々増えています。また重度の障害児者だけでなく歩ける医療的ケア児など、どこにも分類されにくく制度の枠外となり、適切な支援が受けられないケースも増えてきています。そうした医療的ケア児者の在宅生活や就園や就学などを支援する仕組みは未整備のものが多く、また受けられるサービスの量と質に地域間格差があるのが実情です。

令和3年9月に「医療的ケア児及びその家族に対する支援に関する法律」が施行となりました。本法が遵守されることで、医療的ケアが必要でも安心して暮らし続けられる環境や支援が整うことを切望しています。私たちの取り組みは、医療的ケア児者とその家族の声に拠るものとします。必要に応じて私たちは関係各所との円滑な連携を図りながら、具体的な制度や社会基盤整備、より良い地域作りの場に積極的に参加し、行政の良きパートナーとして活動してまいります。

けがや病気により途中で医療的ケアが必要になって困っている人や困難を抱えて苦しんでいる人などが一人でもなくなりますよう、どこにも相談出来ずに悩んでいる人がいれば本会が寄り添える窓口になれたらと思っています。そしてどんなに重い病気や障害があっても当事者本人やその家族が尊厳を持って暮らし続けられる希望ある未来を目指します。どんな些細なことでもお気軽にご連絡頂けると嬉しいです。

当会が、愛知県内の医療的ケア児者の家族会として、歩みはゆっくりでも長く続く家族会に成長させて頂けたらと思っています。ただいま会員さん大募集中です！！（どなたでもOKです！）皆さま、ご協力の程どうぞよろしくお願いいたします！



R5.6.4 設立記念イベントの様子（にじいろのいえにて）



公式LINE



公式Instagram

@AICHI.CARELINE



入会お申し込みQRコード



代表の村瀬晴美さん

お問い合わせメールアドレス aichi.careline@gmail.com

はるひの家ってどんなところ？

今回は、本館棟2階にある「はるひの家」について紹介します。

医療療育総合センターは医療、療育、研究の3つの機能を併せ持っていますが、そのうちの療育部門の一翼を担っているのが、はるひの家です。

はるひの家は児童福祉法に基づく福祉型障害児入所施設であり、知的障害のある3歳から18歳未満のお子さんが生活しています。定員は33名で、居室は性別、年齢、障害の特性別に5つの小規模ユニットに分かれており、より家庭的な環境の中で生活していただけます。

はるひの家では、お子さんの成育歴や心身の状況、日常生活動作を把握したうえで、一人ひとりの特性に適した個別支援計画を作成しています。この計画に基づいて、保育士や児童指導員が各種の療育手法を活用しながら日常的な生活訓練・生活指導を行い、お子さんの基本的な生活能力や社会生活能力の向上を図っています。

また、短期入所の受入れも行っています。保護者の病気などで一時的に家庭での療育が困難な場合や、保護者に休養が必要なときに、短期間の入所を利用していただけます。障害福祉サービス給付の一つとして、市役所（町村役場）で申請手続きをしていただくことが必要となります。

職員一同、お預かりするお子さんに寄り添い、健やかな成長と発達が図られるよう努めてまいります。

はるひの家の療育活動の一部を紹介します。

自立課題

自立課題とは、設定された活動を自分一人ですべてから終わりまで行うことで、集中力や持続力を養うものです。児童の特性に配慮した課題を設定し、最後までやり遂げる力や自信を身に付け、色々なことに取り組む意欲を育てます。



買い物支援、レクリエーション

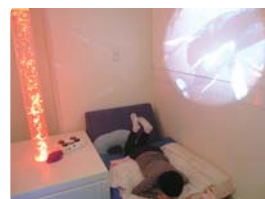
生活にメリハリをつけ、施設の中での生活を意欲的に過ごせるようにするために、月1回を目安にセンター1階にある売店に行き、お菓子や雑誌など好きなものを選んで購入しています。

また毎月、調理や外出、誕生日会などのレクリエーションを実施しています。



スヌーズレン

照度を落とした個室で、マットに横になり、壁に映し出された映像を眺めたり、ヒーリングミュージックを聞くなどしてゆったりと過ごします。心地よい刺激を与える感覚環境を創出して、リラックスを促したり、興味や意欲を刺激する効果があります。



8ページのトピックスにも、はるひの家の記事を掲載しています。是非ご覧ください。

研究所トピックス ～障害システム研究部より～

障害システム研究部では、私たちが日常生活をおくるために欠かせない身体的な機能、例えば、脳や神経の働きを調べたり、その検査や評価のための研究を行っています。また、それとともに、障がいのある人やその家族を取り巻く環境に関する調査研究も行っています。今回は、後者の一つ、公益社団法人日本重症心身障害福祉協会（以下、協会）とともに行った重症心身障害児者施設に長期入所している方々の実態調査について紹介いたします。

発達障害研究所 障害システム研究部 主任研究員 伊東保志



「個人チェックリスト」を用いた施設長期入所児者の実態調査は、1979年（昭和54年）から始まり、時々、調査項目や調査方法を見直され、改訂されつつ、現在も続いている息の長い調査です。最新の集計結果（「令和4年度全国重症心身障害児者施設実態調査」より）では、協会に登録されている136施設に限定される内容になりますが、入所定員数13,873名に対して、12,774名（男性：6,938名、女性：5,836名、入所率：92.1%）が長期間入所されておりました。重症心身障害の判定に広く用いられている大島分類から入所児者の重症度分類をみてみますと、最も人数が多いのが「1」で、次いで「2」、3位が「5」となっており、どちらかと言えば、運動機能より知的機能に重い障がいを有している方が多く入所している傾向がみられました（図1）。また、必要とされる医療的ケアをみますと、吸引や気管切開、胃瘻など呼吸や栄養摂取に関連するケアを必要とされる方が多い一方で、医療的ケアを受けていらない方も多いという実態もこの調査からみえてきました（図2）。私たちは、こうした調査により蓄積されたデータベースが障がいのある方々への支援を考える上での基礎になると考えています。

なお、研究所では、本年度の公開セミナー（開催日：2023年12月22日）が「障がい児者の実態と新しい支援への取り組み」というテーマで開催され、上述の実態調査とともに、様々な支援の例を紹介されました。

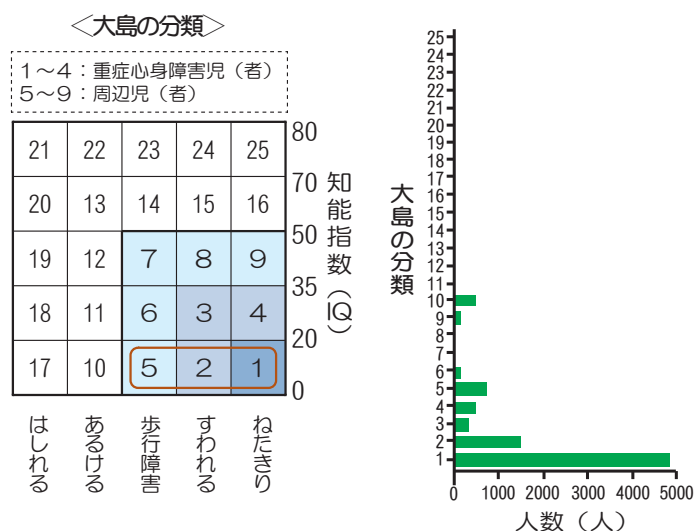


図1 大島の分類（左）と入所児者分布（右）
（令和4年度全国重症心身障害児者施設実態調査より引用・改変）

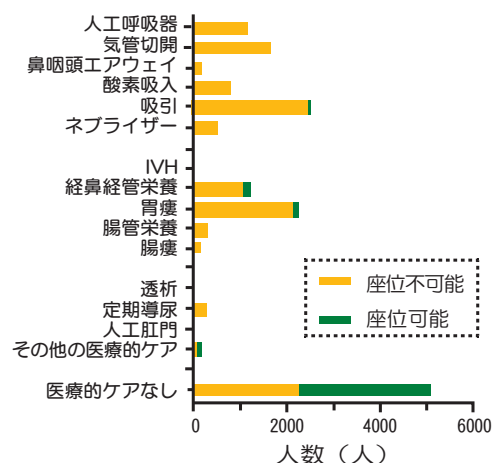


図2 入所児者が受けている医療的ケア
（令和4年度全国重症心身障害児者施設実態調査より引用・改変）

Topics

～はるひの家～ はじめてのセンター祭



2023年9月24日に4年ぶりにセンターふれあいフェスティバルが実地開催されました。コロナの影響により昨年まではオンライン開催だったため、児童にとってははじめてのフェスティバル。お小遣いを持参し、フリーマーケットでぬいぐるみやパンなどの欲しいものを買ったり、ストラックアウトやコリントといったゲームに挑戦したりと楽しみました。また、フェスティバルの終わりには、はるひの家の児童が閉会宣言をしました。大役をしっかりと務め上げました。



ストラックアウト



フリーマーケット



閉会宣言

～こばと棟～ 4年ぶりに開催された「ふれあいフェスティバル」に参加したよ♪

(こばと1病棟) ステージに出演した利用者さんから「みんなが来てくれて嬉しかった。また出たい。」と嬉しそうでした。また、「ドッグセラピーは人が多かった。」との意見が聞かれ繁盛ぶりがわかりました。4年ぶりの開催で、多くの利用者が参加できました。

(こばと2病棟) 4年ぶりの開催ということで、多くの利用者さんが心待ちにしていました。当日は多くの利用者さんやご家族の楽しそうな表情が見られました。利用者さんお二人のパネル展示された写真と感想です。



荻谷一恵さんの絵



江口ちえさんのネイル

「自分の絵をたくさんの人に見てもらえて嬉しかった。ありがとう。」利用者：荻谷一恵さん

「これからも美の追究に頑張ります。写真を見てくれてありがとうございました。」利用者：江口ちえさん

(こばと3病棟) 4年ぶりの実地開催ということで、利用者皆さんにとって待ちに待った日となりました。ステージでは懐かしいピンクレディーの「UFO」とプリンセスプリンセスの「M」を熱唱しました。出店で買い物も満喫し楽しそうな笑顔が見られました。

〔編集委員会〕写真の掲載については、ご本人あるいはご家族の了解を得た上で掲載しています。